

重度・重複障害児担当教師に求められる自立活動の指導方法 —全国肢体不自由特別支援学校への質問紙調査から—

姉 崎 弘

Instruction methods of Jiritsu-katsudo required for teacher
for children with severe multiple disabilities – From a survey
of national special support schools for children with physical disabilities –

ANEZAKI Hiroshi

2022年11月4日受理

抄 録

これまで全国肢体不自由特別支援学校の障害の重い自立Ⅱ類型（比較的反応の乏しい重度・重複障害児）担当の教師グループの活用している自立活動の指導方法に関する調査結果が2019年に報告されている。しかし教師個人が今後習得を希望する自立活動の指導方法はこれまで報告されていない。そこで本稿では、最新の調査報告とは異なるが、2012年調査による「自立Ⅱ類型担当教師の個人が今後習得を希望する自立活動の指導理論・技法」について報告し、合わせて2019年に報告した調査結果を踏まえて、担当教師に求められる指導方法について総合的に考察を行った。その結果、自立Ⅱ類型を担当する教師に求められる指導方法は、順に「摂食訓練」「理学療法」「感覚統合」「動作法」「作業療法」「音楽療法」「スヌーズレン教育」「静的弛緩誘導法」「ムーブメント教育」の9つがあげられた。この結果は、2019年の報告で、自立Ⅱ類型担当教師が今後重視する必要のある6つの指導方法を含むものであった。

キーワード：重度・重複障害児 自立活動 指導方法 スヌーズレン教育 習得希望

I. 問題と目的

これまで肢体不自由特別支援学校では、さまざまな自立活動の指導方法が国内外で開発され活用されてきた。同校における在籍児の障害が重度化、重複化、多様化する中で、教師がどのような自立活動の指導方法を習得したいと希望しているのかを調査によって明らかにする研究はこれまで報告されていないが、今後のこの教育の発展のためには必要であり、意義があると考えられる。筆者は2012年に実施した「重度・重複障害児に求められる自立活動の指導理論・技法及び指導内容に関する調査研究—

全国の肢体不自由特別支援学校への質問紙調査を通して¹⁾の調査結果を2019年に報告している¹⁾。この中で、障害の重い子どもを担当する教師グループが習得した自立活動の指導方法を明らかにした。しかしこの報告の際、紙面の都合上、「今後教師が習得を希望する自立活動の指導理論・技法（いわゆる指導方法）」については、その結果を報告することができなかった。そこで本稿では、最新の調査結果とは異なるが、この調査結果を報告し、合わせて障害の重い重度・重複障害児の担当教師に求められる指導方法を明らかにすることを目的とする。

II. 方法

1. 調査対象

本調査は、「全国特別支援学校実態調査（全国特別支援学校長会,2011）」の冊子²⁾に収録されている全国の肢体不自由特別支援学校（分校・分教室及び知肢併置の特別支援学校を含む）262校を対象とした。小学部・中学部・高等部の「知的障害教育代替類型」、「自立活動を主とする類型Ⅰ（比較的反応が豊かな児童生徒が在籍：「自立Ⅰ類型」とする）」、「自立活動を主とする類型Ⅱ（比較的反応が乏しい児童生徒が在籍：「自立Ⅱ類型」とする）」の3つの類型を担当する教師（計9類型）である。

今回学校現場の実際のタイプの分け方とは異なる場合があると思われるが、本調査を実施する上で便宜的に重度・重複障害児が多く在籍している「自立活動を主とする類型」を「自立Ⅰ類型」と「自立Ⅱ類型」の2つに大別して設定した。この内、特に反応の極めて乏しい重度・重複障害児（最重度児）は自立Ⅱ類型に分類される。

筆者の先行研究（姉崎 弘著「重度・重複障害児に求められる自立活動の指導理論・技法及び指導内容に関する調査研究—全国の肢体不自由特別支援学校への質問紙調査を通して—」（2019）¹⁾）では、教師が最も活用している指導理論・技法に関して学部・類型ごとに、各類型の教師グループとしての活用度を代表教師を対象に質問紙に回答いただき、その全国的な実態を把握し発表した。

一方、本研究では、教師が活用している指導理論・技法に関して、類型ごとにその活用度を教師個人の代表教師1名を対象に回答いただいた。その理由は、先行研究では、各類型のグループの教師たちの全体的な意向を把握できたが、実際に個々の教師の意向がどのようなものなのか、特に自立Ⅱ類型を担当する教師の意向は把握できなかったため、この点を明らかにするために本研究では各校の自立Ⅱ類型の個人の代表教師1名に回答を依頼した。

2. 手続きおよび調査期間

郵送法による質問紙調査を行った。質問紙は2012年1月に依頼文書とともに各学校に9部（各学部の各類型ごとに1部）ずつ送付し、2012年3月までに回収した。質問紙の回答は、各類型を担当する個人の代表教師1名に依頼した。

3. 調査内容

本調査用紙は、「自立活動の指導理論・技法（教師個人の回答用）」（図1）よりなる。本調査で用いた質問紙の調査内容は、①教師個人が「卒後習得した自立活動の指導に

活用しうる理論または技法の活用度」(3件法:よく活用している・活用している・あまり活用していない、の3択式)、および②「今後新たに習得したり、続けて活用したいと思う理論または技法」(多肢選択式)の2つからなる。

ここで使用した用語を解説する。教師が「習得した」指導理論・技法、と記した意味は、教師がその指導理論・技法をマスターしている場合、および完璧にマスターしていなくてもある程度学び実際に教師が活用したことがある指導理論・技法のことを指している。

4. 分析

図1は、肢体不自由特別支援学校で活用している主な自立活動の指導理論・技法をまとめたものである。質問項目ごとに、欠損値(無回答・不正確な回答)を除いて集計・分析した。なお図1において、①～⑳までの自立活動の指導理論・技法は、基本的に、宮崎(1999)³⁾の調査研究で用いた質問紙の各指導理論・技法名を参考にし、さらに2012年時点で新たに実践されている主な指導理論・技法(⑫スヌーズレン(感覚学習)と⑭リマック)の2つを新たに追加して作成した。以下、教師が「習得した指導理論・技法」および「今後習得を希望する指導理論・技法」の両者について、宮崎(1999年,教師個人への調査)と姉崎(2012年,教師個人への調査)および姉崎(2012年,自立Ⅱ類型担当の教師個人への調査)の3つの調査結果について比較し分析する。

A. 先生が、卒後習得した自立活動の指導に活用しうる理論または技法を、以下の各項目の中からすべて選んで、該当する1～3の数字に○をつけてください。

(1. よく活用している 2. 活用している 3. あまり活用していない)

また、同じ各項目について、今後、新たに習得したり、または続けて活用したいと思う理論または技法をすべて選んで、()に○をつけてください。

① 理学療法一般	1	2	3	()
② 作業療法一般	1	2	3	()
③ 感覚統合	1	2	3	()
④ 知覚-運動訓練	1	2	3	()
⑤ ボバース法	1	2	3	()
⑥ ボイタ法	1	2	3	()
⑦ 動作法	1	2	3	()
⑧ 静的弛緩誘導法	1	2	3	()
⑨ ドーマン法	1	2	3	()
⑩ 摂食訓練	1	2	3	()
⑪ ムーブメント教育	1	2	3	()
⑫ スヌーズレン(感覚学習)	1	2	3	()
⑬ ポーテージ法	1	2	3	()
⑭ リマック	1	2	3	()

⑮ 抱っこ法	1	2	3	()
⑯ ペテー法	1	2	3	()
⑰ 遊戯療法	1	2	3	()
⑱ 箱庭療法	1	2	3	()
⑲ カウンセリング	1	2	3	()
⑳ 音楽療法	1	2	3	()
㉑ 行動療法	1	2	3	()
㉒ 絵画療法	1	2	3	()
㉓ モンテッソーリ法	1	2	3	()
㉔ インリアル法	1	2	3	()
㉕ ムーブ	1	2	3	()
㉖ ダンスセラピー	1	2	3	()
㉗ 乗馬療法	1	2	3	()
㉘ 心理検査等の評価法	1	2	3	()
㉙ その他()	1	2	3	()
㉚ 特になし	1	2	3	()

図1 調査項目（教師個人の回答用）

なお、図1において、先行研究（姉崎,2019）¹⁾ で用いた「理学療法一般」と「作業療法一般」の用語は、本研究では、それぞれ「一般」の用語を省略して、以下、それぞれ「理学療法」と「作業療法」と表記して使用した。

5. 倫理的配慮

回答結果は本研究のみに使用し、結果は、統計処理を行い学校や個人が特定されないように十分配慮する。研究結果がまとまったら学校に結果の送付を行い、後日学会で発表し学術論文で公表する。本調査への質問等の問合せ先を明記し返信用封筒を同封した。質問紙への回答及び返送をもって本調査に同意したと見なした。なお、本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項はない。

Ⅲ. 結果

1. 質問紙回収率

すべての都道府県の肢体不自由特別支援学校 157 校（59.9%）から回答があった。表1に、各学部の類型別の質問紙回収率を示した。回収率は平均 54.6%であった。ただし、学校によっては回収されない類型がいくつか見られたため、回収率の平均は少し低くなった。

2. 教員がこれまでに習得した自立活動の指導理論・技法

本稿では、先行研究の宮崎（1999）の結果と比較するため、宮崎の結果も以下に併記した。

表 1 本研究の調査対象の類型および質問紙回収数 (回収率)

学部	類型	調査対象 (件数)	回収数 (回収率)
小学部	知的	210	114 (54.3%)
	自立 I	232	124 (53.4%)
	自立 II	233	129 (55.4%)
中学部	知的	203	107 (52.7%)
	自立 I	214	115 (53.7%)
	自立 II	213	112 (52.6%)
高等部	知的	183	101 (55.2%)
	自立 I	196	111 (56.6%)
	自立 II	194	112 (57.7%)
合計		1878	1025 (平均 54.6%)

表 2 宮崎 (1999) が回収した質問紙数
(宮崎, 1999 p.24 表 1 一部改変)

小学部	149
中学部	140
高等部	126
その他、記載なし	12
合計	427

表 2 は、宮崎 (1999)³⁾ が全国の肢体不自由養護学校に実施した質問紙調査で回収した質問紙数である。宮崎は、小学部、中学部、高等部の 3 つの学部を対象に調査した。一方、姉崎 (2019)¹⁾ が 2012 年に実施した調査との違いは、姉崎は同じ 3 学部内の 3 類型すべて

を、すなわち全 9 類型について調査したことである。

まず宮崎の調査結果 (1999 年)³⁾ を以下の図 2 に示した。宮崎が調査を行った 1999 年頃は、肢体不自由養護学校 (現肢体不自由特別支援学校) の重度・重複化が進行し、また医療的なケアを必要とする子どもたちが新たに教育対象に加えられ在籍が始まった時期でもある。なお、宮崎の調査は、1999 年に全国肢体不自由養護学校 190 校を調査し、質問紙を回収した 160 校 (回収率 84%) について小学部・中学部・高等部を合計した結果をまとめたものである。

以下の図 2 および図 3 では、教師個人が「よく活用している」および「活用している」自立活動の指導理論・技法、いわゆる教師が「習得した」と見なせる指導理論・技法として、この両者を合計して多い順にグラフ化した (以下の図も同じ)。図 2 において、総合的に見て、よく活用している指導理論・技法は、多い順に、1 位「動作法」、2 位「摂食訓練」、3 位「感覚統合」、4 位「理学療法」、5 位「静的弛緩誘導法」、6 位「ボバース法」、7 位「知覚—運動訓練」、8 位「作業療法」、9 位「ムーブメント教育」、10 位「インリアル法」等であった。また図 2 で、その他の指導理論・技法として、ダンスセラピー、AAC (拡大代替コミュニケーション)、マカトン法、水泳・

水治療法、ハロウィック法などがあげられるが、これらは活用度（活用人数）が極めて低いため、図2では割愛した。

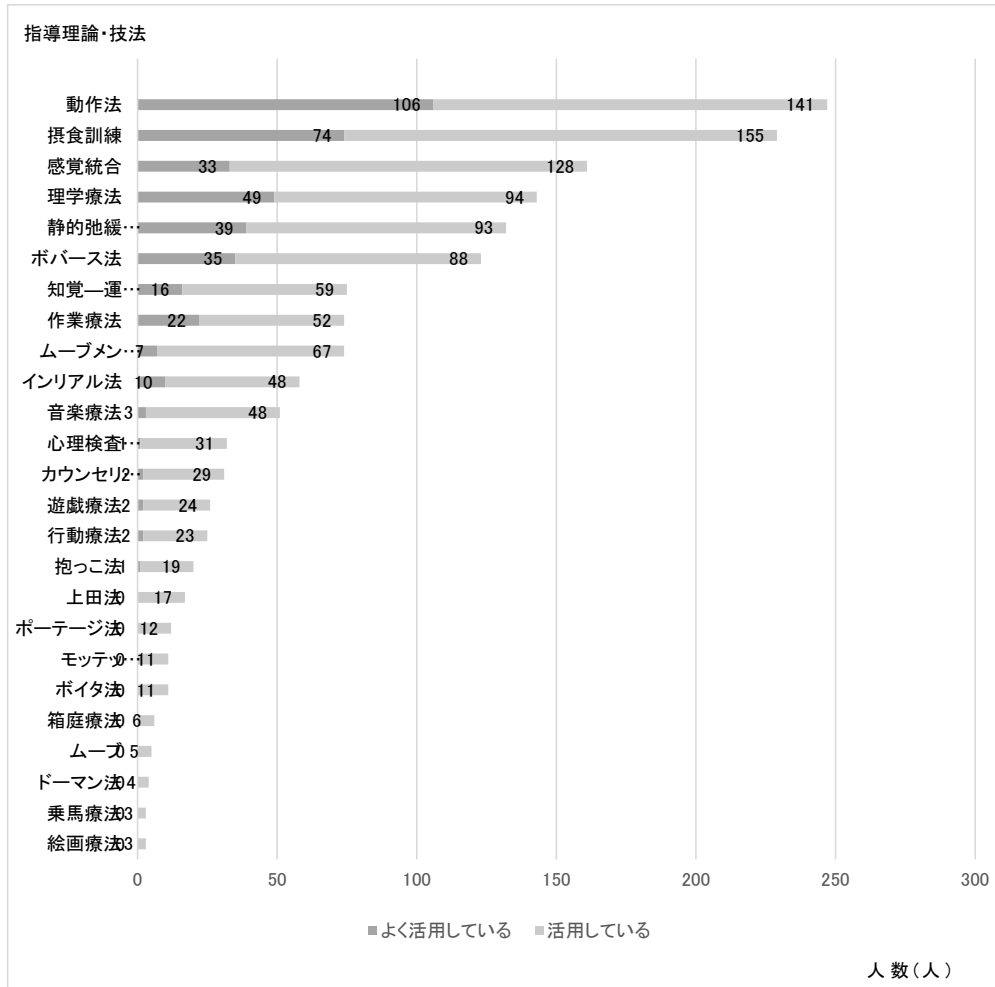


図2 教師が習得した自立活動の指導理論・技法（教師個人）（宮崎,1999年）

また姉崎が2012年に実施した調査結果を以下の図3に示した。この図は、小学部・中学部・高等部の回答した人数を合計したものである。

図3において、総合的に見て、教師個人が習得した指導理論・技法は、多い順に、1位「摂食訓練」、2位「動作法」、3位「理学療法」、4位「感覚統合」、5位「作業療法」、6位「静的弛緩誘導法」、7位「音楽療法」、8位「ムーブメント教育」、9位「スヌーズレン教育」等であった。

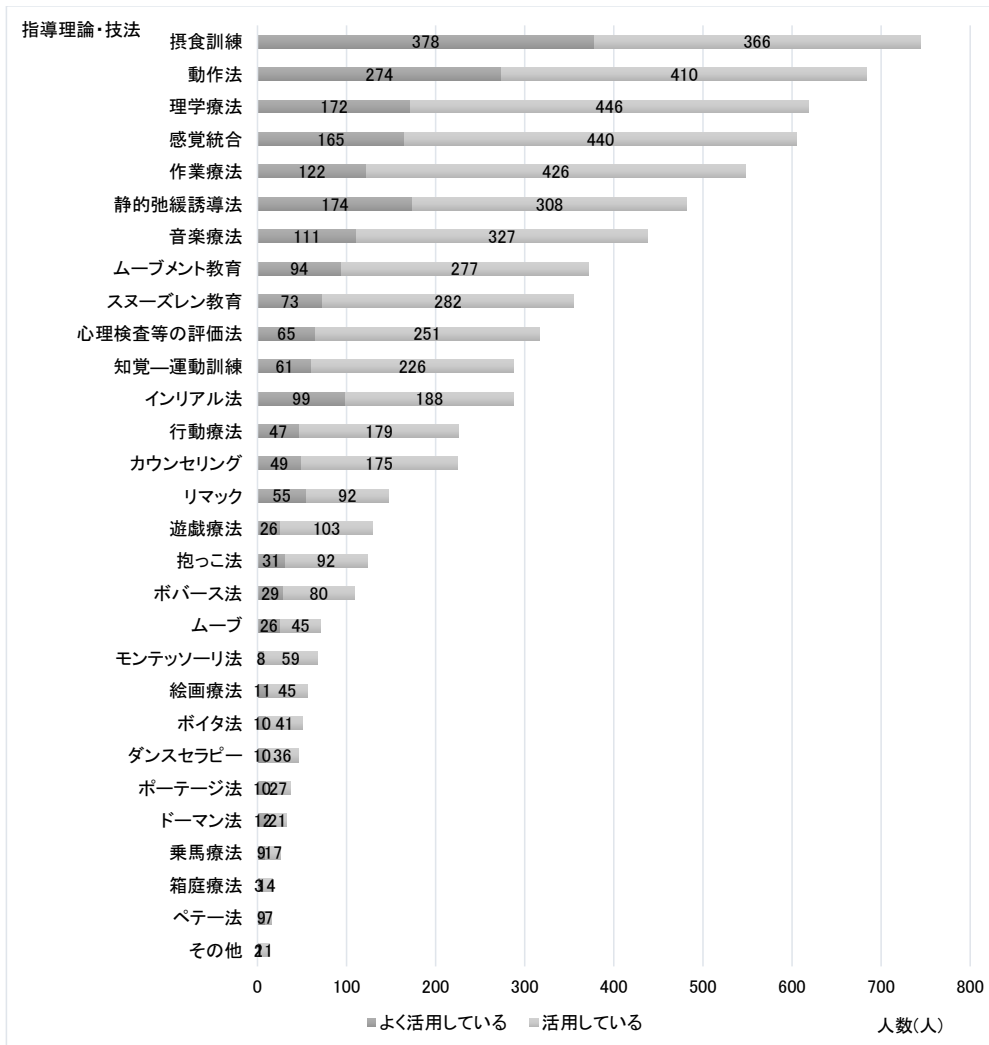


図3 教師が習得した自立活動の指導理論・技法（教師個人）（姉崎，2012年）

※図3で、その他の指導理論・技法として、活用度（活用人数）は低いですが、上田法、FBM（ファシリテーション・ボール・メソッド）、AAC（拡大代替コミュニケーション）・AT（支援機器）、県独自の指導内容表、言語訓練、バイタル・呼吸療法などがある。

また以下の図4に、自立Ⅱ類型を担当する教師個人が習得した自立活動の指導理論・技法（姉崎，2012年）の調査結果を示した。総合的に見て、教師が習得した指導理論・技法は、多い順に、1位「摂食訓練」、2位「動作法」、3位「感覚統合」、4位「理学療法」、5位「作業療法」、6位「静的弛緩誘導法」、7位「音楽療法」、8位「スヌーズレン教育」、9位「ムーブメント教育」等であった。図3と図4では、「動作法」に代わって「摂食訓練」が最も多かった。

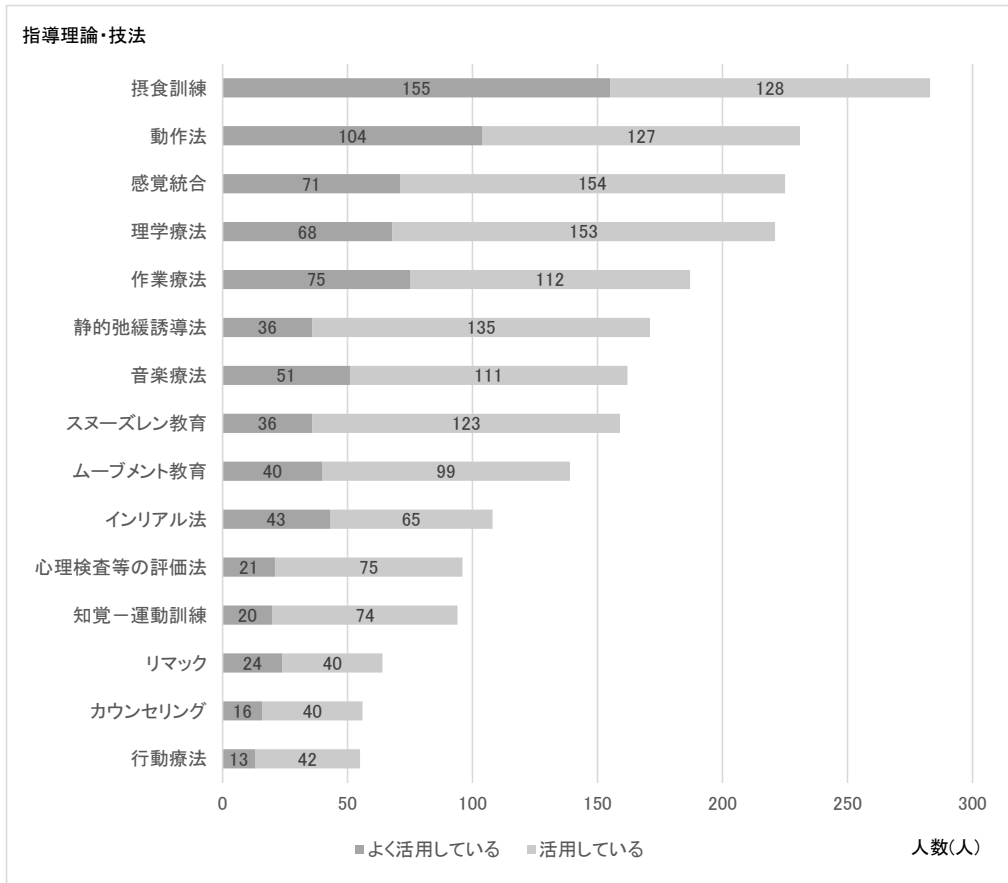


図4 教師が習得した自立活動の指導理論・技法(自立Ⅱ類型担当教師個人)(姉崎, 2012年)

3. 教師が今後習得を希望する自立活動の指導理論・技法(教師個人)(宮崎, 1999年)

宮崎の調査(1999年)によると、以下の図5で、教師個人が今後習得を希望する自立活動の指導理論・技法は、上位20位まで結果を出しているが、主なものは、多い順に、1位「摂食訓練」、2位「動作法」、3位「感覚統合療法」、4位「静的弛緩誘導法」、5位「理学療法」、6位「ボバース法」、7位「音楽療法」、8位「作業療法」、9位「ムーブメント教育」等であった。

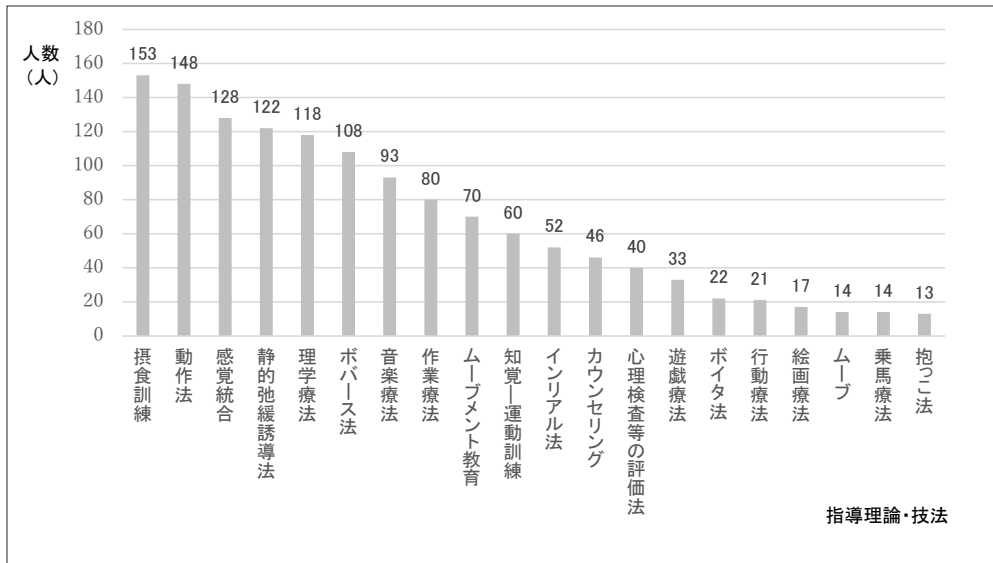


図5 今後習得希望のある自立活動の指導理論・技法（教師個人）（宮崎,1999年）

4. 教師が今後習得を希望する自立活動の指導理論・技法（教師個人）（姉崎,2012年）

姉崎の調査結果（2012年）によると、以下の図6で、今後習得希望のある自立活動の指導理論・技法は、多い順に、1位「理学療法」、2位「摂食訓練」、3位「作業療法」、4位「感覚統合」、5位「動作法」、6位「静的弛緩誘導法」、7位「音楽療法」、8位「スヌーズレン教育」、9位「ムーブメント教育」等であった。

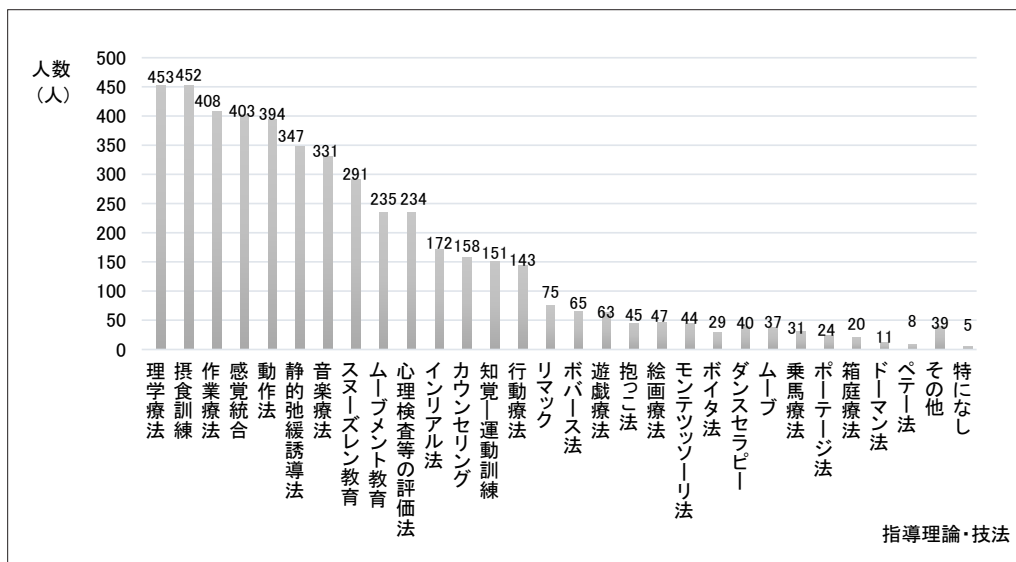


図6 今後習得希望のある自立活動の指導理論・技法（教師個人）（姉崎,2012年）

5. 教師が今後習得を希望する自立活動の指導理論・技法(自立Ⅱ類型担当の教師個人)
(姉崎,2012年)

姉崎の調査結果(2012年)によると、下記の図7で、「自立活動を主とする類型」の中でもより障害の重い児童が在籍する「自立Ⅱ類型」の担当教師が今後習得を希望する自立活動の指導理論・技法は、多い順に、1位「摂食訓練」、2位「理学療法」、3位「感覚統合」、4位「動作法」、5位「作業療法」、6位「音楽療法」、7位「スノーズレン教育」、8位「静的弛緩誘導法」、9位「ムーブメント教育」等であった。

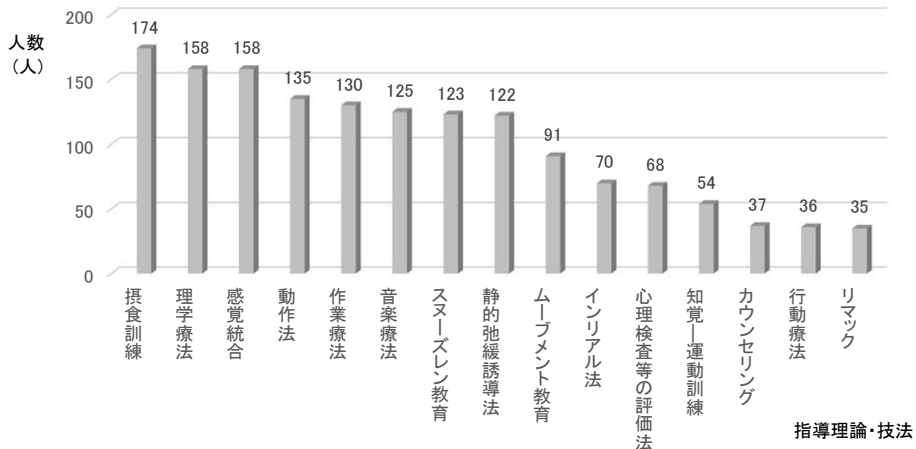


図7 今後習得を希望する自立活動の指導理論・技法(自立Ⅱ類型担当教師個人)(姉崎,2012年)

6. 教師が習得した自立活動の指導理論・技法間の比較

順位	宮崎(1999年,教師個人)	姉崎(2012年,教師個人)	姉崎(2012年,自立Ⅱ類型教師)
1	動作法 247	摂食訓練 744	摂食訓練 283
2	摂食訓練 229	動作法 684	動作法 231
3	感覚統合 161	理学療法 618	感覚統合 225
4	理学療法 143	感覚統合 605	理学療法 221
5	静的弛緩誘導法 132	作業療法 548	静的弛緩誘導法 187
6	ボバース法 123	静的弛緩誘導法 482	作業療法 171
7	知覚-運動訓練 75	音楽療法 438	音楽療法 162
8	作業療法 74	ムーブメント教育 371	スノーズレン教育 159
9	ムーブメント教育 74	スノーズレン教育 355	ムーブメント教育 139
10	インリアル法 58	心理検査等の評価法 316	インリアル法 108
11	音楽療法 51	知覚-運動訓練 287	心理検査等の評価法 96
12	心理検査等の評価法 32	インリアル法 287	知覚-運動訓練 94

図8 教師が習得した自立活動の指導理論・技法間の比較(表中の数値は学校数)

上記の図2と図3と図4の結果を図8にまとめて示し、図5と図6と図7の結果を図9にまとめて示した。図8と図9の数値は回答した学校数を表し、上位12位までを記した。また図8と図9において、宮崎（1999年，教師個人）と姉崎（2012年，教師個人）の調査結果の比較で、順位が2つ以上増減が見られた指導理論・技法には→で増減を示した。

図8で、宮崎（1999年，教師個人）と姉崎（2012年，教師個人）の調査結果を比較すると、教師が習得した自立活動の指導理論・技法の中で、順位を2つ以上上げたのは「理学療法」と「作業療法」の2つでともに医療のセラピーであった。また順位を2つ以上下げたのは「ボバース法」と「動作法」と「知覚－運動訓練」と「静的弛緩誘導法」の4つであった。

7. 教師が今後習得を希望する自立活動の指導理論・技法間の比較

順位	宮崎(1999年,教師個人)	姉崎(2012年,教師個人)	姉崎(2012年,自立Ⅱ類型教師)
1	摂食訓練 153	理学療法 453	摂食訓練 174
2	動作法 148	摂食訓練 452	理学療法 158
3	感覚統合 128	作業療法 408	感覚統合 158
4	静的弛緩誘導法 122	感覚統合 403	動作法 135
5	理学療法 118	動作法 394	作業療法 130
6	ボバース法 108	静的弛緩誘導法 347	音楽療法 125
7	音楽療法 93	音楽療法 331	スヌーズレン教育 123
8	作業療法 80	スヌーズレン教育 291	静的弛緩誘導法 122
9	ムーブメント教育 70	ムーブメント教育 235	ムーブメント教育 91
10	知覚－運動訓練 60	心理検査等の評価法 234	インリアル法 70
11	インリアル法 52	インリアル法 172	心理検査等の評価法 68
12	カウンセリング 46	カウンセリング 158	知覚－運動訓練 54

図9 教師が今後習得を希望する自立活動の指導理論・技法間の比較（表中の数値は学校数）

図9で、宮崎（1999年，教師個人）と姉崎（2012年，教師個人）の結果を比較すると、教師が今後習得を希望する自立活動の指導理論・技法の中で、順位を2つ以上上げたのは「作業療法」と「理学療法」の2つでともに医療のセラピーであった。また、順位を2つ以上下げたのは「ボバース法」と「動作法」と「知覚－運動訓練」と「静的弛緩誘導法」の4つであった。また、姉崎（2012年，教師個人）と姉崎（2012年，自立Ⅱ類型担当の教師）の結果を比較すると、順位を2つ以上下げたのは「作業療法」と「静的弛緩誘導法」の2つであった。

IV. 考察

1. 「スヌーズレン教育」の用語の使用について

本研究では、新たな自立活動の指導方法の1つである「スヌーズレン教育」を調査項目に取り上げて調査していることから、まずこの用語の使用について述べる。姉崎(2013)⁴⁾は学校で行われるスヌーズレン授業について、これを2013年に「スヌーズレン教育」と正式に定義したことから、本稿では「スヌーズレン教育」の用語に統一して用いた。

また今日、スヌーズレン授業は「スヌーズレン(MSE)教育」⁵⁾による授業と考えることができる。すなわち、今日、スヌーズレン(Snoezelen)とMultisensory Environment(いわゆるMSE:多重感覚環境)の用語は、ISNA-MSE(国際スヌーズレン—多重感覚環境協会)の見解によると、2010年に国際的に同義語⁶⁾⁷⁾であるとして理解され公表されていることから、「スヌーズレン(MSE)教育」が国際的な正式名称になると考えられるが、日本では、これまで「スヌーズレン」の用語が社会的に根付いており広く使用されてきていることから、日本国内でこの用語を使用する場合には、MSEの用語を省略して、単に「スヌーズレン教育」としても何ら差し支えないと考える。

2. 宮崎(1999年,教師個人)と姉崎(2012年,教師個人)の調査において教師が「習得した」指導方法

時代と共に、肢体不自由特別支援学校に在籍する児童生徒のさまざまな障害や特性は少しずつ変化してきており、それらに対応した指導が各時代に学校側に求められている。主な自立活動の指導理論・技法(以下、自立活動の指導方法と記す)は約30ほどありさまざまである。教師はその中のいくつかを習得して、あるいは学びながらそれらを組み合わせたり、それらから適宜抽出したり、独自に応用・工夫しながら効果的な自立活動の授業を行っているものと推察される。

図8で、宮崎(1999年,教師個人への調査)と姉崎(2012年,教師個人への調査)の結果を比較すると、教師の習得した自立活動の指導方法は、従来からの「ボバース法」と「知覚—運動訓練」と「インリアル法」が順位を下げ、一方「作業療法」と「音楽療法」が順位を上げた。これは、2000年頃から医療的なケアを必要とする児童等、より障害の重い子どもたちの在籍が増加してきた⁸⁾といわれることから、教師に、医療的なセラピーである「作業療法」と「音楽療法」の方法の習得ニーズが高くなったことが主な要因として考えられる。

また図3で姉崎(2012年,教師個人への調査)の結果は、多い順に1位「摂食訓練」、2位「動作法」、3位「理学療法」、4位「感覚統合」、5位「作業療法」、6位「静的弛緩誘導法」、7位「音楽療法」8位「ムーブメント教育」、9位「スヌーズレン教育」等であった。この結果は、先行研究¹⁾の姉崎(2012年調査)の教師グループへの調査で「最も活用している」指導方法の活用合計順位の結果(表5-2)と比較して、順位の多少の入れ替えは見られるものの、7位までは同じ指導方法が入っていた。

3. 宮崎（1999年，教師個人）と姉崎（2012年，教師個人）の調査において教師が「今後習得を希望する」指導方法

また図9で、宮崎（1999年，教師個人への調査）と姉崎（2012年，教師個人への調査）の結果を比較すると、教師が今後習得を希望する自立活動の指導方法は、姉崎（2012年，教師個人の調査）では、多い順に、1位「理学療法」、2位「摂食訓練」、3位「作業療法」、4位「感覚統合」、5位「動作法」、6位「静的弛緩誘導法」、7位「音楽療法」、8位「スヌーズレン教育」、9位「ムーブメント教育」等であった。この中で、「理学療法」と「作業療法」の2つが順位を上げ、一方、「動作法」と「静的弛緩誘導法」と「ボバース法」と「知覚－運動訓練」の4つが順位を下げた。また新たな指導方法の「スヌーズレン教育」が8位になった。この結果も、前項と同じように、教師による医療のセラピー方法に関する習得ニーズが高く、「理学療法」と「作業療法」が上位を占めたと考えられる。一方従来から知られる「ボバース法」と「知覚－運動訓練」と「動作法」と「静的弛緩誘導法」がそれぞれ順位を下げた。今日では、特に「ボバース法」や「知覚－運動訓練」は各学校のニーズが低くなり、授業の中ではあまり使用されなくなったと考えられる。

4. 自立Ⅱ類型担当教師（姉崎，2012年）が習得した指導方法と今後習得を希望する指導方法

図8で、姉崎（2012年，自立Ⅱ類型教師への調査）の調査結果で、自立Ⅱ類型担当教師が習得した指導方法に関しては、1位「摂食訓練」、2位「動作法」、3位「感覚統合」、4位「理学療法」、5位「静的弛緩誘導法」、6位「作業療法」、7位「音楽療法」、8位「スヌーズレン教育」、9位「ムーブメント教育」等であった。9位までは、多少順位の入替えはあるものの、教師個人への調査結果と同じ指導方法が占めていた。

また図9で、自立Ⅱ類型担当教師が今後習得を希望する指導方法に関しては、1位「摂食訓練」、2位「理学療法」、3位「感覚統合」、4位「動作法」、5位「作業療法」、6位「音楽療法」、7位「スヌーズレン教育」、8位「静的弛緩誘導法」、9位「ムーブメント教育」等であった。9位までは多少順位の入替えはあるものの、自立Ⅱ類型担当教師が習得した指導方法と同じ指導方法が占めた。

指導方法の中で、特に「スヌーズレン教育」が担当教師の「習得した指導方法」として8位に、また「今後習得を希望する指導方法」として7位になり、それぞれ順位を1つずつ上げた。

上記の7位までの指導方法は、姉崎（2019年）の先行研究において「最も活用している指導理論・技法（指導方法）」として指摘した指導方法と同じものが入っていた。

5. 「スヌーズレン教育」は今日学校現場で求められる自立活動の指導方法の一つであると考えられる

上述より、自立Ⅱ類型担当教師（姉崎，2012年）が「今後習得を希望する指導方法」として、「音楽療法」と「スヌーズレン教育」が順位を1つ上げてそれぞれ6位と7位になった。特に、この「スヌーズレン教育」は、わが国では比較的新しい自立活動

の指導方法であるが、今日の肢体不自由特別支援学校の在籍児童生徒の障害の重度化および重複化の傾向に応じて、人の五感を心地良く刺激して、脳の活性化を促しさまざまな反応を引出す指導方法としての「スヌーズレン教育」が多くの学校の教師たちから支持され必要とされていたと考えられる。その主な理由を、以下に考察することにする。

この授業では、①身体を動かすことが極めて困難な最重度児を含む重度・重複障害児が特に運動・動作を必ずしも要求されず、②本人の好きな感覚刺激を活用して感覚を心地良く刺激して情緒を安定させて楽しめる環境設定や③担当教師との温かな共感的な関わり合い（言葉かけやスキンシップを通して）があり、④その場に居ながらにしてその持てる力で授業に無理なく参加することができ、対象児のさまざまな発達を引出すことが可能な「スヌーズレン教育」は、重度・重複障害児や最重度障害児にとって、⑤やさしく、わかりやすい学習場面を設定することが可能であるためである、と考えられる。このように「スヌーズレン教育」は、対象児が無理せずにその有するさまざまな能力や可能性を効果的に引き出すことのできる、今日学校現場で求められている自立活動の有効な指導方法の一つであると考えられる。

V. まとめと今後の課題

本研究において、障害の重い自立Ⅱ類型を担当する教師個人が今後習得を希望する指導方法は、多い順に、1位「摂食訓練」、2位「理学療法」、3位「感覚統合」、4位「動作法」、5位「作業療法」、6位「音楽療法」、7位「スヌーズレン教育」、8位「静的弛緩誘導法」、9位「ムーブメント教育」等であることが示唆された。この結果は、2019年の姉崎の調査報告で明らかにされた、自立Ⅱ類型担当の教師グループが活用していた指導方法である「摂食訓練」、「理学療法」、「感覚統合」、「静的弛緩誘導法」、「音楽療法」、「スヌーズレン教育」の6つを含み、その他として「動作法」と「作業療法」と「ムーブメント教育」の3つを追加したものであった。

姉崎（2019年）の先行研究の（表5-2）では、最も活用している指導方法に着目したため、順位が上位にある指導方法以外の指導方法、特に8位以下については、合計の学校数が比較的少数であったことから、よりの確に、求められる指導方法を特定することが難しかったと考えられる。この点について、本研究の調査では、各指導方法について「よく活用している」と「活用している」の学校の合計数をもとに順位付けを行ったことから、図8や図9に見られるように、比べる学校数の数値が比較的大きくなったことで、求められる指導方法をよりの確に特定しやすくなったと考えられる。

従って、姉崎（2019年）¹⁾の先行研究の結果と本研究の結果の両者を踏まえると、障害の重い児童への自立活動の指導方法として、今日的にこの9つの指導方法が重度・重複障害児の担当教師に特に必要とされていると考えられた。

またそれぞれの指導方法は目的や手法等が異なることから、授業の目標や指導する対象児一人ひとりの実態に応じて、適用する指導方法をよく吟味し検討してから指導する必要があるといえる。

今後の課題として、以下の点があげられる。

今日、今回の調査から約10年が経過することから、自立活動の指導方法に関しては、教師の習得ニーズが変化してきていることが推測される。今後、今回の調査で実施できなかったAAC等を含む最新の自立活動の指導方法を加えた調査項目を新たに設定して、再度同様の調査を実施することで、今日的に担当教師が習得を希望する最新の指導方法を明らかにして、今回の調査結果と比較検討する必要がある。

謝辞

本調査にご協力をいただいた全国肢体不自由特別支援学校の先生方に感謝を申し上げます。

引用・参考文献および資料

- 1) 姉崎 弘 (2019) 重度・重複障害児に求められる自立活動の指導理論・技法及び指導内容に関する調査研究—全国の肢体不自由特別支援学校への質問紙調査を通して—. 兵庫教育大学教育実践学論集, 56(20), 59-72.
- 2) 全国特別支援学校長会 (2011) 全国特別支援学校実態調査.
- 3) 宮崎 昭 (1999) 肢体不自由養護学校の養護・訓練に関する調査. 肢体不自由教育, 141, 22-27.
- 4) 姉崎 弘 (2013) わが国におけるスヌーズレン教育の導入の意義と展開. 特殊教育学研究, 51(4), 369-379.
- 5) 姉崎 弘 (2020) 重度・重複障害児の「スヌーズレン教育」に関する考察. スヌーズレン教育・福祉研究, 3, 23.
- 6) Eijgendaal, M., Eijgendaal, A., Fornes, S., Hulsegge, J. E., Mertens, K., Pagliano, P., Rowe, J., Verheul, A., Vogtle, L. K. (2010) Multisensory Environment (MSE/ Snoezelen) -A Definition and Guidelines, 1-18 (<https://www.isna-mse.org/assets/mse-position-paper-idea-forum.2010vs1.pdf>.) 参照日: 2020年7月10日
- 7) Pagliano, P. (2017) Multisensory Environment and Snoezelen. スヌーズレン教育・福祉研究, 1, 8-13.
- 8) 西川公司 (2012) 第3章 肢体不自由教育の今日的課題. 3 自立活動の指導の充実. 筑波大学附属特別支援学校編著 肢体不自由教育の理念と実践. ジアース教育新社, 48-49.

